優秀賞

地域文化研究部門（団体）

明治通りの調査

東京都立戸山高等学校
地理歴史部
（黒石憩、田頭尚大、堺田樹、遠藤浩明、本間裕洋、清水邦彦、山西創太）

応募の動機

私達は、最も身近な地域「東京」の過去・現在・未来を探るため、本校の目の前を通る『明治通り』の交通状況、沿線の建造物や歴史などを調査しました。そして、これらの要素が政治・経済都市「東京」の形成・発展へ密接に関わっていることを実感しました。この成果をより多くの人に伝えたいと考え、応募しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

『明治通り』の最端は「夢の島」である。五輪を控える湾岸地域を北上すると、新東京郵便局や複数の鉄道車両基地が存在し、東日本の物流の重要な拠点としての立場が窺える。道路の僅かな高低に、地盤沈下に対抗する大正期の努力を感じつつ、江戸期開削の仙台堀川や小名木川の名残に江戸の商業発展を思わせ、幹線は亀戸駅を越える。

この地域では近現代の産業発展での活躍がセイコーミュージアムなどに窺うことができ、平安末期の開拓で鎮守された小村井香取神社もある。また、かつて明治の著名人が屋敷を連ねたという風光明媚な白髭橋付近を過ぎると、千住に入って隅田川を渡る。

この地域は隅田川駅や目黄不動などの東北とのつながりを感じる建物が多い一方、江戸期に小塚原刑場があった縁で木賃宿街「山谷」が形成され、刑死者や貧民層を弔う寺社も多い。武家屋敷が占めた日光街道以西において、北部は田端機工街として戦時や高度経済成長を支え、南部は近現代の著名な文士が移り住み、田端文士村として栄えた。

隅田川の水運の名残を感じさせながら、交通量の多い幹線は王子へと向かい、急勾配を登って飛鳥山に着く。飛鳥山公園は徳川吉宗が植えた桜の名所であり、春は花見で混雑する。また、飛鳥山三つの博物館と呼ばれる、北区飛鳥山博物館、紙の博物館、渋沢博物館がある。

ここから幹線は南下し、中山道（白山通り）や首都高と交差すると、関東大震災を機に整備された池袋繁華街を通る。この辺りから都電荒川線や副都心線と並走し、戦前建造の千登世橋をくぐる。神田川を渡り、高田馬場の繁華街を西に見ながら、早稲田大学理工学部や我らが戸山高校の前を通ると、幹線は新宿へ向かう。

新宿駅付近の地域には、新宿の総鎮守である花園稲荷神社や、江戸城裏鬼門を鎮護した天龍寺などと、江戸期の内藤新宿に関わる建物も多い。明治期には多くの人に親しまれている新宿御苑（旧新宿植物御苑）が整備され、東郷平八郎を祀る東郷神社も作られた。

木造駅舎の原宿駅に近づくと、世界からも高い評価を受ける壮大な明治神宮の森が望まれる。ハチ公の最期が発見された渋谷駅辺りから幹線は東に曲がり、広尾の武家屋敷跡地付近には多くの大使館が立ち並ぶ。幹線は古川に沿って進み、かつて多くの都電が行き交っていた交通の要所であり『明治通り』の起点「古川橋」に着く。

今後の課題として、調査メンバーを増やし様々な視点から調査することが挙げられるだろう。33.3kmの『明治通り』を調査するにあたり、メンバーが多いほど、それぞれの得意とする分野が集結し、研究に厚みを持たせられるとともに、メンバー間での相互刺激も活発化する。量・種類から多様性を確保することにより、この研究に更なる発展を与えられるだろう。今回の入賞をきっかけに、これまで以上に地理歴史的分野を強め、専門的な研究を行っていきたい。

明治通り沿いには私たちが通う戸山高校がある。写真は明治通りを調査する部員の様子。

溝田橋交差点で明治通りは写真手前から左側へ曲がる。歩道橋の形が下から見るとXの形をしていて、ユニークでおもしろい。

あらかわ遊園はレンガ工場だったこの土地に着目した王子電気軌道株式会社が大正11年5月1日に開園した。今では、都区内唯一の公営遊園地となり、アトラクションやどうぶつ広場や釣り堀などがある。

優秀賞

地域文化研究部門（団体）

今年も祖父江の虫送りを追って
～杏和高校　４年目の参加～

愛知県立杏和高等学校
郷土研究チーム
（澤井翔太、早川侑那、山口唯月、木村美穂、坂東壮一郎、飯田真世、蓑島千東、伊藤響、大島将義、加藤亜矢、金森絢香、河野美里、佐藤愛奈、佐藤陽葉里、沢田茉優、菖蒲志保、髙松誠、立松真実、今枝香帆）

応募の動機

日本史の授業で先生から「虫送りに参加して体験をまとめてみないか」、「地域行事に関わることはいい経験になり、先輩たちもこの３年関わってきた。関わる人が変わっても杏和高校として継続することは大切」と言われました。ちょうどこの時期に源平合戦について学んでおり、そこに登場する武将である斎藤実盛と今回調べた「虫送り」が密接に関係しているということもあり、今回のコンテストへの応募に至りました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私たちの高校は愛知県稲沢市の旧祖父江町にあります。そこで行われ、愛知県の無形民俗文化財になっているのが祖父江の虫送りです。平氏の武将の斎藤実盛が稲に足を取られて倒れたところを、殺されたことから怨霊となって農民を困らせました。この実盛の怨霊を鎮めることで虫を追い払い豊作を祈るのが「虫送り」です。今回２年生19人が集まり、以下のことについて取り組みました。

行列の後、松明を投げ入れる

松明の作り方を習う

１）稲沢市祖父江町の虫送りへの参加

人形・松明作りを行う一部と、虫送りを行う二部とに分かれています。実盛人形と松明の作り方にも昔からの方法があり、私たちはそれを地域の方たちから教えていただきながら作業を行いました。それと同時に、地域の方たちの虫送りへの想い、虫送りの今後など、切実な生の声もお聞きすることができました。二部では実際に火をつけた松明をみんなで協力して担ぎ、実盛人形を先頭に田の周りを練り歩き、当時の農民の気持ちを考えました。研究チームのメンバーそれぞれが感じたこともまとめました。

２）他地域の虫祭・虫送りについて

一宮市尾西民俗資料館の学芸員の奥野絵美さんから尾西（一宮市の最南端、稲沢市祖父江町のすぐ北の地域）の玉野の虫祭と、その翌週に行われる一宮市阿古井周辺の虫祭を紹介していただき、実際に見学させていただきました。「農家が減ったこともあって年々簡素化が進んでいる」という地域の方のお話から、地域の方の想いを感じることができました。

３）市史・町史・村史の中の虫送り（文献調査）

虫送りについて、私たちが通学しているこの尾張西部ではどう行われていたかを知るために、近隣の図書館で調べました。そこで得た情報を地域ごとの違いがわかりやすいように表にしてまとめました。この調査の結果、虫送りがかつては尾張西部全域で行われていたことが確認できました。しかし、地域によって虫送りの方法が微妙に異なっていることが分かりました。ここでは以下の３項を示します。

①　虫送りの特徴

虫送りの内容は大きく分類すると、３つに分けられます

A：実盛人形等を先頭に松明に火を灯し行列し、祭りの最後に松明と共に火に投じる。
B：実盛人形等を用いて行列するが、松明など火は使用しない。
C：実盛人形は登場せず、御幣やお札を各々の田に立てる。

全体的に実盛人形や松明などを用いて、最後火に投じる場合が多いです。しかし、南へ下っていくにつれて、津島神社の強い影響を受け、津島神社からのお祓いをうけたお札を虫送りに用いたり、場所によっては火を使わないという傾向がみられました。

②　虫送りの「歌」の違い

多くの虫送りには「歌（お囃子）」があります。今回は北から南へ順番に並べて比べました。各地で微妙な違いがありました。

③　虫送りの呼称の違い

「虫送り」という呼称とは別に、それぞれの地域に古くから伝わる呼称があることが分かりました。例：稲沢では「おんか」または「豊熟祭」。

この文献調査をして、改めて昔からある虫送りが、祖父江の地に今でもほぼそのままの形で残っていることは、本当に貴重ですごいことだと実感することができました。

今回の虫送りへの参加を機に、さらに祖父江やその周辺地域の虫送りについて深く関わり、地域の方たちとのつながりを大切にして、今回の調査でわからなかった虫送りの詳細をさらに調べていくことが今後の課題です。また、今年は参加できなかった常滑の虫送りにも来年はぜひ参加して、地域ごとの違いをもう一度比べて、虫送りについての考えを深めていきたいと思います。

佳　作

地域文化研究部門（団体）

ふるさとの川の恵み
～郷土の宝「益田川」と私たちの暮らし～

岐阜県立益田清風高等学校
社会探究
（新井未緒、奥田伶奈、蒲隆成、鎌倉菜摘、小林礼奈、忍由希奈、立道結佳、中田恋、長塚竜我、荒木美有、奥野節音、日下部乃愛、小山未紗衣、二村聖菜、細江侑以、松森遥香、湯山千春）

応募の動機

私たちの学校は、地域社会とのつながりを大切にした取り組みを行っており、このコンテストに向けた作品作りはその一環です。毎回地域の人たちとの交流やフィールドワークを通じて、地元にある新しい魅力を発見してきました。そこで今年は地元の「益田川」をテーマにした作品を作り、新たな魅力を探っていこうと考えました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私たちは、次の三項目に分けて調査、フィールドワーク、インタビューなどを行い、レポートにまとめました。

１．益田川について

益田川は、御嶽山や乗鞍山を水源として旧益田郡沿いを流れる自然豊かな清流で、正式名称を飛騨川といいます。非常にきれいな川で、鮎やアマゴ、アジメドジョウなど、きれいでおいしい魚がたくさん生息しています。昔から地域の人たちは、この豊かな川の幸を使い、朴葉ずしなどの郷土料理を作ってきました。朴葉ずし以外にも、甘露煮やてんぷら、イワナの骨酒など、豊かな川の幸を用いた特産品が多いです。また、食文化だけでなく、観光面に目を向けると、益田川の支流には滝が多くあり、滝めぐりをすることができます。さらに、水量が多いため各所にダムや発電所が建設されて私たちに電気を供給してくれています。このように、現在の私たちの暮らしに密接にかかわる川が益田川です。

朴葉ずし用の鱒の養殖場跡

２．益田川の歴史

飛騨地方は古代から、豊富な山林資源の故に中央政府から注目されてきました。良質な木材と高い技術を持った職人（飛騨の匠）は、税金の代わりとして都市に送られました。税金として中央政府にわたる木材を流すために使われたのが益田川でした。私たちの祖先は、上流から切り出された材木を傷つけないように上手く下流へと流す「川狩り」という仕事をしていました。また、益田川は大洪水を起こす暴れ川としても有名で、学校の近くには洪水の被害から逃れることを願って建てられた塔があったり、洪水にまつわる民話も伝わっています。

３．地域の方と考える益田川と私たちの暮らし（今後の課題）

フィールドワークなどの活動とともに、益田川に精通しておられる方にお話を伺いました。「岐阜の川人文化研究会」の長尾伴文さんと、全国的に活躍しておられる益田川の釣り師天野勝利さんです。お二人から伝統的な漁具や、そこに込められた先人の工夫、想いを伺い、改めて私たちが住んでいる地域には素晴らしい文化が根付いていると再確認できました。

この素晴らしい文化を将来につなげるためにはどうすればよいのでしょうか。お話を伺ったお二人は、優れた文化を将来に残すべく、商品開発や体験学習の企画などとても活発に活動されています。そんなお二人と交流する中で気づいたことがありました。活動の根底にあるのはふるさとの川への愛情であるということです。ふるさとの川を守り、育て、伝えていくには、まず私たちが魅力を再確認し、その文化をしっかりと守っていく姿勢を忘れてはならないと感じました。その上で、もっと多くの人々に関心を持ってもらい、地域の活性化につなげていきたいと考えています。

イワナ（昭和34年）の魚皮拓（釣った魚の皮をはぎ、天日干ししたもの）

益田川に鮎の友釣を伝えた山下福太郎制作の山下竿

佳　作

地域文化研究部門（団体）

諏訪信仰について

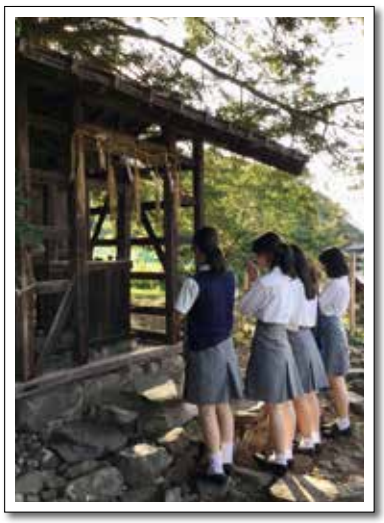
東京・香蘭女学校高等科
諏訪信仰
（澤村望恵、大上文、大野紗季、大谷佳凜、久保愛実、栗林純伽、佐藤眞子、
鈴木恵、髙木美礼、竹野桃加、田村未来、野中麻優、松永めい）

応募の動機

高校２年生の時に『古事記』を読むという選択授業をとっていたメンバーを中心に、諏訪にまつわる信仰を調べてみようと先生に誘われました。国譲り神話の最後に諏訪に逃げた「建御名方神」と「諏訪大社」について、諏訪に行ってフィールドワークしたので、「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストに応募してみようということになりました。

研究レポート内容紹介

「諏訪大社」は、上社二社と下社二社の四社で構成されています。「諏訪大社」は本殿がないのが特徴（諏訪造）で、古代の様式を残していることがわかります。「諏訪大社」の祭神である「建御名方神」は、『古事記』において大国主神の御子神として紹介されていますが、国譲りの場面でしか登場しません。また『日本書紀』『出雲国風土記』『出雲国造神賀詞』には「建御名方神」という名すら存在しません。



御頭御社宮司（ミシャクジ）総社

「建御名方神」が諏訪に侵入した時、「洩矢神」を長とする先住民族が迎えうちますが、「洩矢神」は敗北、諏訪は「建御名方神」の支配地となり、「建御名方神」の子孫である諏訪氏が大祝という位に就き、「洩矢神」の子孫の守矢氏が神長官という位に就く体制ができました。神長官守矢氏は諏訪に古くからいる「ミシャクジ」という神を、唯一、上げ下ろしできる家で、現当主は78代目です。柳田國男氏は『石神問答』の中で「最も不思議に存ぜられ候一事はシャグジの信仰に候」と語るほど、「ミシャクジ」神についてはほとんど解明されてません。「ミシャグジ」は縄文時代から名前や実体のない、精霊的な存在として崇められ、豊穣などを祈る神として信仰されていたそうです。

神長官守矢史料館で田村館長のお話を聞く

諏訪の神にまつわる話としては、南北朝時代の説話集『神道集』「諏訪縁起事」の中に「甲賀三郎伝説」があります。冬の諏訪湖の御神渡りは、一説によると甲賀三郎が契りを結んだ、春日姫のもとに一年、維摩姫のもとに一年と交互に通う道と言われています。諏訪湖が氷点下10度前後の日が続くと、氷結した表面の裂け目が山のようにせり上がることで、一本の道筋となって御神渡りとなります。御神渡りが起きない年は「明けの海」と呼ばれます。

「諏訪大社」にまつわるお祭りのうち、御頭祭は、毎年4月酉日に穀物の実りが豊かになるように祈って、「諏訪大社」に祀られている神のお使いが信濃国中を巡回する時に際して行われた祭と言われています。以前は上社前宮の十間廊に鹿の頭を75頭、また白兎や鯉など色々な肉の塊が供えられていたそうです。また、御柱祭（正式名称：式年造営御柱大祭）は、山の中から選ばれた16本を御柱とし、それらを山から曳き、境内に建てるという一連の行事で、寅と申の年（6年ごと）に1度行われます。御柱祭の歴史は、記録に残るもので804年桓武天皇の御代からで、信濃国一国をあげて盛大に行われる様になりました。

今後の課題

諏訪に行き、「建御名方神」以外に諏訪の地にもともとあった信仰や神々の存在を知ることが出来たものの、まだ未解決なことが多く、今後、神長官守矢家の方や研究家からお話を伺い、少しずつ謎を解明してきたいです。

佳　作

地域文化研究部門（団体）

人形浄瑠璃公演活動をとおして地域の活性化を図るとともに阿波の情勢を研究する

徳島県立那賀高等学校
人形浄瑠璃部
（尾脇嘉彦、浦本一喜、岡部悟子、乃一ゆか、廣田桃果、増田大雅、岡本悠斗）

応募の動機

私たち人形浄瑠璃部は、部活動が設立されてから、地域に古くから残る農村舞台の公演に積極的に参加してきた。その際、単に浄瑠璃を演じるだけではなく、地域における人形浄瑠璃や農村舞台とその役割について学ぶことで、より表情豊かに演じられるのではないかと感じた。阿波人形浄瑠璃への意識を高め、活性化を図ることを目的に応募した。

研究レポート内容紹介・今後の課題

徳島県は、農村舞台の残存数が全国一と言われ、その中でも本校のある那賀地域には現在も活発に利用される農村舞台が多く残っている。私たちは、農村舞台での公演活動に積極的に取り組む中で、農村舞台の特性やその役割について体験をもって学んでいる。人形浄瑠璃が最も栄えたとされる明治中期から昭和中期の実態を知り、それぞれの時代における地域の情勢を理解することにより、後継者不足が課題とされる阿波人形浄瑠璃への意識を向上させ、次世代へ継承するとともに、地域の活性化を図ることを目的に本研究を始めた。

本研究では、公演活動を行いながら、地域の方々からお話を聞くことに加え、農村舞台が残る地域の実地調査、民俗資料館等の訪問、人形浄瑠璃に精通されている方へのインタビュー調査をすすめた。

今回、調査・探究によって知り得たことを、７点に整理した。

⑴　明治から昭和初期にかけて、徳島県の産業は「藍商」、「林業・木工関係」が最盛であった。

⑵　吉野川流域では、舞台小屋があり淡路からプロを招き、人形浄瑠璃の公演を有料で開催していた。

⑶　中山間地では、経済状況の多様化により、一部の資産家が太夫や語り手等に賃金を払い、近隣で浄瑠璃に興味関心のある方を神社の境内等に集め、無料で人形浄瑠璃の公演を開いていた。

⑷　県内に残る農村舞台は、「88」あると言われ、この数は、日本でも第１位であるが、活用しているものは多くない。

⑸　県土の約65％を占める本県の中山間地に多い農村舞台は、神社の境内やそれらに付随して増築された建造物が主体となる。増築や修繕にも、多くの材木が必要であり山間地の林業が盛んな地域で活性化された。

⑹　昭和30年過ぎから、藍商が低迷となりそれに伴い吉野川流域の舞台小屋が姿を消してきた。同時に、木材価格の変動及び後継者（担い手）不足により林業関係産業の衰退に伴い、農村舞台も同様に低迷してきた。

⑺　徳島県の主要とされてきた産業が低迷し、働き盛りの年代の者が、地域を離れて仕事につく傾向が多くなり、地域伝統文化を継承する人材が居なくなってきた。

以上、７つの要因により、明治から昭和初期にかけて最盛を誇った阿波の伝統文化が低迷してきた。こうした背景を知り理解したうえで、これから私たち人形浄瑠璃部にできることは何か。伝統文化を継承する意義と使命について再確認するとともに、活性化させる必要性や重要性について、前向きに検討し、試行錯誤しながらも、いろいろなことに挑戦し続けたい。

十郎兵衛屋敷館長さんのお話

神山寄居座長さんのお話

優秀賞

地域文化研究部門（個人）

ダンスで笑顔溢れる地域へ
～テーマパークパレードの魅力を地域活性化運動に取り入れる～

東京・東京大学教育学部附属中等教育学校　３年
髙　橋　理　歩

応募の動機

私は、この研究を卒業研究として取り組んだ。進めていく上で、現在行われている千代田区「社会を明るくする運動」の始まりは､戦後の荒廃した社会の中で犯罪防止のために行われた銀座パレードであることが分かった。このことから、現在の運動が地域の伝承によって続いていることに気づき、より深まった。その中で、このコンテストを見つけ、応募した。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私は以前バトントチームの活動で地域活性化運動の一環で行われているパレードに参加し、ダンスは参加側も観客側も楽しめるものであり地域活性化の良いきっかけになるのではと思った。そこで、「ダンスを用いた地域活性化運動を広め、地域に笑顔を届ける」ことを目的に研究した。また、「運動を広める」ためにテーマパークパレードの特徴を参考にし、新たな運動形態も提案した。

まず、地域活性化とは何を指すのかを明らかにした。それを受けて、地域活性化運動について参加者・観客・主催者の3者の視点から見て、千代田区「社会を明るくする運動」の課題を提示し、これらを改善してより効果的な運動を目指して本研究を進めた。地域活性化の目的は「安心安全で生き生きとした明るく存続的な地域づくり」であり、運動の課題は①観客への意識づけの強化、②ダンサーと観客の距離を縮める、③運動への注目を増やす、の３点である。そして、テーマパークパレードの特長を用いて提案した4つの運動形態の中から、現在の「社会を明るくする運動」のパレードルートに停止点を設け、観客に参加してもらうことを加えた「屋外パレード（途中停止・参加型）」を推薦した。参加型により、観客を「見物人」から「参加者」に変えるテーマパークパレードの特長を用いて、運動に親近感を持ってもらう。また、「地域を笑顔に」という「テーマ性」を取り入れ、ダンサーの意識統一をすることで課題①が改善できる。さらに、テーマパークパレードの特長であった「ダンサーと観客のコミュニケーション」の時間を設け、近い距離での両者の接触を可能にして課題②が改善できる。また、屋外開催でより多くの人の目に触れられ、途中停止型により歩くことが好ましくない高齢者や赤ちゃん連れの方も安心して見られる。これらにより「世代を超えて楽しめる」パレードにし、課題③が改善できる。

以上により、地域活性化には明確な目的があり、ダンスは人を笑顔にして地域を明るくし、人々の繋がりをつくる観客とのコミュニケーション手段であることが分かった。したがって、「ダンスで地域活性化」という運動は効果的であると結論付けられた。しかし、地域活性化運動・テーマパークパレードについて観客側からの意見が聞くことができなかったため、違った視点からの新たな発見もすべく、より多くの方へインタビューすること。この研究結果を実際の地域活性化運動に取り入れてどのような変化が見られるのかを確かめること、を今後の課題とする。

第 64 回社会を明るくする運動 パレードの様子

ミツバチ（くまのぷーさん）をイメージしたダンサーがゲストとコミュニケーションをとっている様子

優秀賞

地域文化研究部門（個人）

漬物は語る ～世界に誇る日本食の起源とは～

愛知県立杏和高等学校　２年
飯　田　真　世

応募の動機

自分の知らないことを知りたい、自分の見たことないものを見たい、という好奇心が今回のコンテストに応募しようと思った一番のきっかけです。題材にする祭りや民話を調べているとき、自分が長く住んでいる地域であるにもかかわらず見聞きしたことがない物が多いことに驚きました。その時、悔しさとともに感じた「今までこの地域のことを私は何も知らずに生きてきたんだ」という何とも言えない感情を私は決して忘れないと思います。その中で、全国で唯一漬物の神様が祀られ漬物に関する祭りも長く行われている萱津神社の香の物祭りを題材に選びました。そして自分の住む地域のことを胸を張って話すことが出来るようにと、研究を進めました。

研究レポート内容紹介

１　資料集め

市の図書館へ行って題材に関することが書かれている本を探したり、資料館へ行って祭りのパンフレットを見せてもらったりしました。古い資料を読み解くことは大変でしたが、様々な人に助けられて当時の神社や祭りに関することを深く学ぶことが出来ました。何も知らないところからのスタートだったので、一つ疑問が浮かぶとそれに連なるようにいくつもの疑問が浮かんできて、時間が足りないと思うほどでした。

漬け込み神事で漬け物をする私

２　関係者への聞き取り

祭りの行われている萱津神社の宮司と神職に話を聞くことが出来ました。宮司と話した際は１時間以上に及ぶインタビューの中で、資料を読むだけではわからなかった受け継がれてきた思いを聞くことが出来ました。貴重な文献や写真を見せていただき、実際に生の声として神社や祭りに関する意見を聞くことで、確かに歴史はここに今も流れているんだと肌で感じることが出来ました。

地域から奉納された野菜

３　祭りへの参加

初めて参加した香の物祭りは、想像していた通りの小さな小さな地元のお祭りでした。しかし、その中には他県から来ている方や外国人の姿も見えました。俳句の会で「香の物祭り」がお題に出たため、メンバーのみんなで来たという方々もいました。いろいろな方と話していく中で、皆香の物祭りを地域の誇りであると強く感じていることが伝わってきました。実際に漬物を作る工程(漬け込み神事)にも参加しました。多くの野菜を最後まで人の手で甕の中に漬けていく作業は、地域の子供たちにとってはとても楽しいようで何度も何度も並んでは野菜を手に取り甕の中に入れていました。とても微笑ましく、今の楽しいがいつか受け継いでいきたいに変わってくれることを心の中で祈りました。

今後の課題

今回の研究を通し、一歩を踏み出すことで自分が今まで見たことのない世界を見ることが出来るんだと知りました。何事にもチャレンジし前向きに考えていく力がついたと自分でも感じています。研究の中では香の物祭りに参加するところで終わってしまっていますが、その後漬物を熱田神宮に奉納するところまで追いかけて調査を進めていけたらいいなと思っています。たくさんの人に支えられて完成できたこの研究ですが、ここで終わってしまうのではなく今この場所をスタートとして、支えてくださった方々に恩返しできるような地域活動をしていきたいと思っています。ありがとうございました。御馳走様でした。

佳　作

地域文化研究部門（個人）

雑司が谷鬼子母神御会式に学ぶ

東京・明治学院高等高校　３年
山　本　明香里

応募の動機

アメリカへ交換留学し、現地で日本の伝承文化について紹介したときに自分の無知を再確認しました。日本に帰国後、幼少期から参加している御会式について深く調べたいと思ったのがきっかけです。高校生活の締めくくりに応募しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

東京都の池袋の大都会のとなりに雑司が谷という静かな街があります。そんな雑司が谷の御会式に私は幼少期から毎年参加してきました。御会式はもともと、日蓮聖人の供養のために行われてきました。また、雑司が谷の御会式は毎年10月16日から三日間おこなわれます。太鼓を叩き、纏を振りながら万灯行列が街の中を進みます。万灯行列は、講社という集団から成っていて、講社はその地域の人々で構成されているもの、同級生や仲が良い人たちで構成されているものなど様々です。最近では豊島区指定の重要文化財に指定され、宗教行事というよりも、地域の一大行事という位置付けが強くなってきています。御会式は、その時代に合わせて形を変えています。私がまだ生まれていないときの御会式と今の御会式では、参加者の数、様子共に大きく違うことに気づきました。さらに、引っ越してしまった人もこの日は雑司が谷に戻ってきて共に御会式参加する、という光景がよく見られます。また、御会式の準備や纏の練習のために地域の大人と小学生などが交流する場が多いです。豊島区立南池袋小学校では、休み時間に纏を貸し出して先生や上級生が纏の振り方を教えたり、太鼓のリズムを教えたりしています。さらに、南池袋小学校では、御会式当日に先生方や児童たちが集まり、燈友会という講社で参加するなど、積極的に地域の文化についての教育をすすめています。その意味で御会式は「人と人をつなぐ」という大切な役割を果たしています。

今後の課題としては、まず後継者問題が挙げられます。講社の長である講元は高齢になっている傾向があり、纏の指導者も高齢化しています。また、最近では見物客が増加傾向にありますが、それに伴い安全面の心配もでてきています。1番大切なのは、これからの御会式を伝承していく私たちが御会式についての正しい知識を持ち、時代の変化に対応しながらその素晴らしさを後世に引き継いでいくことです。

池袋の街と万灯

一昨年の参加の様子

佳　作

地域文化研究部門（個人）

農家について本当に知ってる？
～秋田県横手市の農家の生活について～

東京・大妻多摩高等学校　１年
川　嶋　みずか

応募の動機

私が在学している高校は中高一貫校なので、高校受験がない代わりに中学３年時に卒業論文を課せられていました。私は、『～農業について～　わたし、農家継ぎます！』という自分が農家になったことを仮定し、どうしたら農家は儲かるかについての論文を書き、学内最優秀賞をいただきました。このことで、秋田県横手市の地域の特色に興味を持ち今回のコンテストに応募しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私の祖母の兄（論文中では本当は大叔父なのですが私の感覚上、曽祖父と書いています）は秋田県横手市で「あきたこまち」という品種の米を作っている米農家です。この論文を書こうと思った時、せっかく親族に米農家がいるのだから書物を調べて書く論文ではなく、私のいる環境だからこそ書ける論文を書くというのが私の目標でした。そのため、今回の論文では皆さんが知っているような名産品（きりたんぽなど）に視点を置くというよりは日常生活でよく食べられているものや親族がいるからこそ分かる行事のしきたりに視点をあて、書きました。例えば、味噌。私は今、祖母の姉の手作り味噌を食べています。この味がはっきりした味噌を生まれたときから食べているので、家庭科の調理実習で食べる市販の味噌がおいしいとは思えません。また、行事で言うとお盆。東京では送り火を焚いたりする家は滅多にないのでお盆＝休みという感覚が強いと思いますが、秋田県ではお盆の準備は早朝から始まったりと、私たちが何気なく食べているもの・いつの間にか過ぎている行事でも受け取り方に大きな違いがあります。自分の暮らしがこうだから、どこも同じ感じでしょ？という考えをもう一度考え直せるような論文になるよう心掛けました。今後の課題としては、人に読みやすい論文を書き続け、その読んだ人に「へぇ、そうなんだ。面白い！」と思ってもらえるような論文に、そしてもっと内容を膨らませられるように自分の個性が論文から滲みだしてくるような論文が書けるように努力していきたいです。

執筆風景

最後に『農家について本当に知ってる？』という論文を評価してくださりありがとうございました。

手作りの味噌

地域文化研究部門選評

國學院大學教授　新谷　尚紀

■総評

高校生の皆さん、若い人たちの研究意欲には、実にたくさんの可能性が秘められています。①疑問を発する力、②調べる力、③分析して結論にまとめる力、その３つこそが貴重な研究の力です。これからもその３つをずっと大切にしてください。ただ、若者の素朴な意欲に対しては、よい指導基準が示されることが大事です。みなさんはその、よい指導基準を示していただける先生方に恵まれて、ほんとうによかったですね。

一般的に研究成果についての評価基準として共通しているのは、専門の研究者の場合でも同じなのですが、以下の５つの点です。１．問題発見や着想の上での独自性、２．情報収集の上での直接性や確実性、３．情報整理の上での論理的工夫や努力の跡、４．立論の手順における論理的実証性、５．結論としての新たな知見の明確性、です。このコンテストに参加した高校生のみなさんの場合もこれを基準として読んでみました。１．の問題発見については、入賞作のすべてが身近な問題発見から出発しており、高く評価できました。２．３．はやはり文献調査と歴史情報の確認を行なった上で実際の現地調査と現場情報のていねいな収集ができているかどうか、という点が重要です。文献調査と民俗調査との両立ができている場合は評価が高くなります。４．５．はハイレベルな要求ということになりますが、若い高校生のみなさんと、現場で指導しておられる先生方との熱意が感じられる応募作品が多かったと思います。これからも、上記の１．から５．の評価基準を参考にして、このような実際的な学問探求が若い人たちによって積み重ねられていくと、日本の学問の未来も大きく開けていくにちがいないと思います。

■団体の部

優秀賞

「明治通りの調査」
東京都立戸山高等学校
地理歴史部

明治通りの調査、よくがんばりましたね。自分たちの都立戸山高校の前を通る身近な道路が、そこからどこまで続き、どんな世界へとつながっているのだろう、という発問がまずよいです。渋谷・新宿・池袋をつなぐ目の前の明治通りが、南は港区から伸びてきた環状道路で、北は王子を経て台東区から江東区の夢の島までつながっているということを知り、さらに都心部からの放射状のそれぞれの幹線道路と交差して、果てしなく広がるルートであることを知ったのですね。高く評価される点を挙げておけば、まず第一に、その取り組みの姿勢です。そして、自分たちの足でその現場に行って調査している点です、夢の島、神宮前交差点、など七つのポイントを集中的に調べてその地理と歴史を追跡している点、三、地図や写真を多く掲載して読む人にわかりやすく伝えようと努力している点、四、出典を明示して参考データの裏付けを明示している点、などです。これからもがんばってください。

優秀賞

「今年も祖父江の虫送りを追って～杏和高校　4年目の参加～」
愛知県立杏和高等学校
郷土研究チーム

祖父江の虫送り行事について、四年続けての調査、よくがんばりましたね。先輩がこれまで調べてきたこともよく学習して、それをふまえながら自分たちの手でしっかりと調査をしている点がまずは評価できます。以下、評価できる点をあげておきます。一、集まった19人が、全員でやること、と、時間的に可能な人がやること、という二つの対応を考え実行している点、これによりしなやかな対応力が磨かれています。二、豊富な写真資料が掲載され、実地調査と聞き取り状況も臨場感があり、優れた調査データが得られている点、三、参加者19名がそれぞれ自分の現場体験をリアルに描きとどめている点、四、地元の資料館の学芸員の方のアドバイスを受けて一宮市の玉野や阿古井など近隣の虫送り行事ついても調査している点、そして図書館で尾西地区の計14の虫送り行事に関する自治体史の調査情報を収集している点、などです。これからもがんばってください。

佳作

「ふるさとの川の恵み～郷土の宝「益田川」と私たちの暮らし～」
岐阜県立益田清風高等学校
社会探究

地域密着の調査で地元の益田川のことをよく調べています。評価できる点をあげておきましょう。一、川人文化研究会の長尾さんから貴重な話を聞いている点、何よりも経験豊かな伝承者から直接教わることが

大切です。二、その長尾さんからの聞き取りで、鮎の友釣りという漁法がもともとこの岐阜県下にはなかったということ、この地域の友釣り漁法を伝えたのは伊豆からやってきた山下福太郎さん(1899－1963)であったことなど貴重な情報が得られている点、三、伝統漁法テンカラ釣りの名人、天野さんから自然と川と人間の営みの中に漁法や漁具など貴重な技術とともに、自然の恵みに感謝するそして川を大切に守るという精神も教えてもらい、自分たち自身の学習としている点、四、フィッシングセンター水辺の館での調査でリアルな体験をしてそれを報告している点、などです。現地調査、伝承者からの直接の聞き取りやそこからの学びが大切です。これからもがんばってください。

佳作

「諏訪信仰について」

東京・香蘭女学校高等科

諏訪信仰

「『古事記』を読む」という選択授業からはじまり、よくここまで調べましたね。評価できる点をあげておきます。一、教室で古事記を読むという授業で学んだところで文字からだけの受け身の知識の習得に止まるのではなく、そこから諏訪信仰について深く追跡している点、二、たいへんたくさんの参考文献を集めて、よく読んで知識を整理している点、ただし、参考文献の中には、良質の記録や文献も多く含まれていますが、なかにはパンフレット類、作家の推察、辞典の類などもあります。高校生ですからまだまだ先の事でしょうが、学術的に調査や研究を行なう場合には参考文献の吟味も必要になります。三、事前の準備をしてから、直接諏訪の現地を訪れて、主要な場所を数多く回って情報を集めている点、四、そして、机の上で文献を読んでいたときと、現場に行ってみたときのちがいに気が付いている点、それは実はひじょうに大事なことなのです。次のアプローチの仕方を考える必要が出てくるからです。そこからまた新たな発見へもつながるでしょう。これからもがんばってください。

佳作

「人形浄瑠璃公演活動をとおして地域の活性化を図るとともに阿波の情勢を研究する」

徳島県立那賀高等学校

人形浄瑠璃部

かつて昭和30年（1955）当時、林業を主要産業として約15,000人の人口で活気のあった那賀町が、平成29年（2017）の現在は約9,300人となっている。しかし、そうした中で地域の活性化をめざして活動する若い人たちの姿がある。何よりもそれが貴重である。歴史に培われてきた地域社会は、なかなかしぶとい、それが日本社会の底力である。評価できる点をあげてみる。一、いま述べた郷土の民俗芸能の伝承への参加と地域社会への貢献へという活動動機である。二、活動計画として、復活・実践・伝承へ、聞いて学ぶ・行って探究・調べて究める、そしてグローカルに発信、というしっかりとした計画性が立てられてその実践がなされている点、三、具体的な活動の様子が豊富な写真データとともに示されていてわかりやすい。四、後半部に収録されている新聞記事やパンフレット類で、貴重な情報が収録されており、自分たちの活動の位置づけを理解してもらえるように工夫している。これからもがんばってください。

■個人の部

優秀賞

「ダンスで笑顔溢れる地域へ～テーマパークパレードの魅力を地域活性化運動に取り入れる～」

東京・東京大学教育学部附属中等教育学校

髙橋　理歩

自分が幼稚園のころから通っているバトントワーリングチームでの体験をもとに、ダンスとパレードの意義について追及した姿勢がたいへんよい。動機づけが明確だからである。二、用語の定義についてもしっかりとした準備ができており、それにより具体的なテーマパークパレードの事例分析に論理的な解読を心がけている。三、千代田区における地域活性化運動の現状を調べ、東京ディズニーランドをはじめその他のダンスレッスンへの参加型調査をしっかりと行なっている点、四、そうした作業の上で、屋外パレード（途中停止・参加型）がよりよい地域活性化運動の形態としてもっとも適しているという結論を得ている点、などである。これからもがんばってください。

優秀賞

「漬物は語る～世界に誇る日本食の起源とは～」

愛知県立杏和高等学校

飯田　真世

自他の本棚からという「漬物」についての身近な疑問から、しっかりと関連する情報を集めてよくまとめましたね。漬物はたしかに、日本の伝統的な食文化の中でも重要なものです。日本各地の漬物文化関連資料情報の収集と比較、そこから地理的な地域差や、歴史的な漬物の変遷史が明らかになるといいですね。これ

は一地域の追跡ながら貴重な研究でした。評価できる点をあげておきましょう。一、旧甚目寺町にある萱津神社の「香の物祭り」を中心に、その祭りに参加しての調査情報をよく集めており、写真データなどで分かりやすく示している点、二、熱田神宮との関係まで聞き取りできており、印刷物ではあるがその関連資料も入手して歴史的な追跡も試みている点、三、萱津神社の宮司さんへの聞き取り調査情報も貴重である。四、また後半の部分に、関連する文献類やパンフレットなどの情報を数多く掲示して参考に供している点、などです。これからもがんばってください。

佳作

「雑司が谷鬼子母神御会式に学ぶ」

東京・明治学院高等学校

山本　明香里

子どものころから地域の秋の一大イベントであった鬼子母神の御会式について、アメリカ留学中に、しっかりと説明できなかったところからあらためて調べてみることとしたという。評価できる点をあげておこう。一、御会式の行列構成や10月16日、17日、18日のルートがわかりやすく示されている点、二、万灯についての情報や太鼓についての大切な情報がよく調べられていてわかりやすく示されている点、三、纏をはじめとする衣装類についても調べている点、四、参加者への聞き取り調査でリアルな現場情報が集められている点、などである。国際化の中で、これからも地元の伝統文化についてしっかりと調べて、説明し情報発信できるようにがんばってください。

佳作

「農家について本当に知ってる？～秋田県横手市の農家の生活について～」

東京・大妻多摩高等学校

川嶋　みずか

自分の身近な生活の中から、秋田県横手市の農家と自分の家の食生活が家族や親せきを通して深くつながっていることに気づき、他人の目を通した外からの調査でなく身内の目からの内からの調査を試みて、よくがんばりましたね。評価できる点をあげておきましょう。一、横手市の位置関係と曽祖父の農家経営の現状をまず説明している点。二、親族が集まり大宴会を開いて親睦を深めているむかしからの横手地方の風習がリアルに記されている点、そして、それとともに現在の曽祖父の生活リズムが示されている点、三、秋田の漬物、砂糖愛、味噌愛、こしあん作りなどの食文化の一端がよく示されている点、四、お盆や彼岸などの行事についてや、豪雪地帯の冬の食材確保のための一つの手立てとして自家用の缶詰機をもって自家製缶詰を作っていることを紹介している点、などである。東京に住んでいても農村のむかしからの生活につながっていることについて、これからも調査などがんばってください。

地域文化研究部門選評

国立歴史民俗博物館　名誉教授　常光　徹

■総評

団体の部、個人の部ともに最優秀賞は見送られたが、しかし、今回も充実した内容の作品が揃っていた。戸山高等学校地理歴史部の「明治通りの調査」は、分担をして調査をした部員七人の努力が、まさに環状線のように繋がって生まれた成果といえよう。杏和高等学校郷土研究チームは、４年間、祖父江の虫送りをテーマにして調査をつづけているが、今年もまた、新たな発見と展望が示された。髙橋理歩さんの「ダンスで笑顔溢れる地域へ」は、研究の狙いに沿って計画的に調査を実施し、それが論理的にまとめられていて読み応えがあった。飯田真世さんの「漬物は語る」は、本論を構成するために実に多様な史資料に目を通していることが、分厚い資料編からうかがえて興味深かった。いずれの作品も、自身の体験や身近な生活の場から発想して取り組んだテーマだけに、着実で実感のこもった内容である。

■団体の部

優秀賞

「明治通りの調査」

東京都立戸山高等学校

地理歴史部

母校の前を通っている明治通り（33.3km）を中心に、その沿線の歴史や現在の街の状況などについて調査をした力作である。七人の部員が区間を分担し、10ヶ月をかけて調べた内容だけに充実している。毎日のように見ている環状線だが、それは部分的、断面的な光景といってよい。今回、起点から終点までをたどることで、明治通りをめぐる歴史と文化のまとまった世界が描き出されていて興味深い。身近な生活の場への関心から生まれた成果である。また、写真と地図が効果的で、位置関係が掴みやすいし、なにより、読んでいて楽しかった。

優秀賞

「今年も祖父江の虫送りを追って～杏和高校　4年目の参加～」

愛知県立杏和高等学校

郷土研究チーム

タイトルに掲げているように４年目の調査である。今年はメンバーが19名と多いが、それぞれができる範囲で行事に参加し、体験を通して実感、そして考えるという姿勢は変わらない。松明の燃やし方一つをとっても、風向きなどによって微妙に違ってくる。そこにさまざまな工夫と智恵がこめられているのに気づいたのは収穫である。今回は祖父江の虫送りだけでなく、近隣で行われている行事を調べて記録し、また、尾張地方の虫送り資料を収集して検討するなど、地域による違いから祖父江の行事を相対化する視点がうかがえる。

佳作

「ふるさとの川の恵み～郷土の宝「益田川」と私たちの暮らし～」

岐阜県立益田清風高等学校

社会探究

地元を流れる益田川（飛騨川）を取り上げて、川をめぐる人々の暮らしの歴史についてのレポートである。なかでも、伝統漁法と釣り文化に造詣の深い長尾伴文氏と釣り師の天野勝利氏を招いての話は興味深い。大きな魚が少なくなったのは、護岸工事や流路の整備とも関係しているという長尾氏の指摘は、生活の安全と自然環境を考える上で大切な問いを投げかけている。天野氏の毛バリの制作とテンカラ釣りの話には、川や魚を深く知る人ならではの知恵と工夫が見られて示唆に富む。

佳作

「諏訪信仰について」

東京・香蘭女学校高等科

諏訪信仰

諏訪大社を中心とする信仰について調査をし、まとめたものである。事前の学習が周到で、関係する神話、伝説、祭礼などについて、文献を丁寧に読み込んでその特徴や課題が分かりやすく整理されている。それぞれが問題意識をもって参加したフィールドだけに、現地での見聞から理解が深まった場合もあれば、新しく生まれた疑問や新鮮な発想など、各自が感じた内容がよく伝わってくる。充分に準備をして現地を歩くことの大切さがわかるレポートである。

佳作

「人形浄瑠璃公演活動をとおして地域の活性化を図るとともに阿波の情勢を研究する」

徳島県立那賀高等学校

人形浄瑠璃部

2015年に誕生した人形浄瑠璃部の活動内容と、そこから学んだ阿波の伝統文化に関する知見をまとめている。「実践から復活、伝承へ」「聴いて学ぶ」「行って探求」「調べて究める」「グローカル化に発信」と明確に目標を定めて実践している。県内を中心に活動実績を重ねるとともに、人形浄瑠璃に関する歴史や文化についても積極的に調査を進め、着実に力をつけていることがわかる。試行錯誤しながらも、前向きに挑戦していく姿勢が感じられて頼もしい。

■個人の部

優秀賞

「ダンスで笑顔溢れる地域へ～テーマパークパレードの魅力を地域活性化運動に取り入れる～」

東京・東京大学教育学部附属中等教育学校

髙橋　理歩

バトントワーリングチームの一員として千代田区の地域活性化運動に参加をしてきた髙橋さんが、さらに効果的で魅力あふれる運動をめざして行った調査・研究の成果である。全体の構成がしっかりしており論旨が明確である。とくに、ＴＤＬをはじめ４つのテーマパークに注目し、そこから得られた知見をもとに、千代田区のパレードが抱える課題、改善策および予想されるメリット・デメリット等について論じていて興味深い。ダンサーとしての自身の体験が根底にあるが、インタビューや関係資料を駆使して、具体的かつ論理的に描いており説得力がある。

優秀賞

「漬物は語る～世界に誇る日本食の起源とは～」

愛知県立杏和高等学校

飯田　真世

愛知県あま市の萱津神社で行われる「香の物祭り」について調査し、その歴史や祭りの現状についてまとめたものである。日本で唯一の漬物の神として信仰をあつめる祭りの報告は、本殿祭と漬込みの神事をはじめとして、今日の祭りの姿がわかる貴重な資料である。また、明治維新で熱田神宮への香の物の献納が途切れたあと、大正期に復活するまでの経緯を、聞き書き等で明らかにし、さらに、復活前と復活後の変化について比較している点も興味深い。とくに、本論を裏付ける資料編が充実しているのは評価される。

佳作

「雑司が谷鬼子母神御会式に学ぶ」

東京・明治学院高等学校

山本　明香里

雑司が谷鬼子母神御会式について、その由来や用いる道具、当日の行列などについてまとめたものである。山本さん自身が、子どもの頃から参加をしているだけに、御会式が近づいてきたときの、わくわくするような雰囲気が伝わってくる。記述の内容も具体的でわかりやすい。長い歴史をもつ御会式だが、道具や行列には、その時々の好みや工夫があり、少しずつ変化をしている様子が描かれていて示唆に富む。また、参加者の話をもとに、最近の問題点や課題を指摘していて参考になる。

佳作

「農家について本当に知ってる？～秋田県横手市の農家の生活について～」

東京・大妻多摩高等学校

川嶋　みずか

秋田県横手市に住む曽祖父（大叔父）の暮らしぶりや、家を中心とした年中行事、さらに秋田県の食文化の特色についてまとめている。毎日のように口にしている味噌汁や漬物など家庭の味が、祖母の兄弟がいる横手から届けられていることから関心が芽生えたようだ。身近な生活から発想し、調査をした結果を軽快な文章でつづっている。お茶っこは一杯で返すな、お正月よりも大晦日を重視といった、調査で気づいた事柄をさらに発展させると、民俗的に興味深い成果が得られるだろう。